

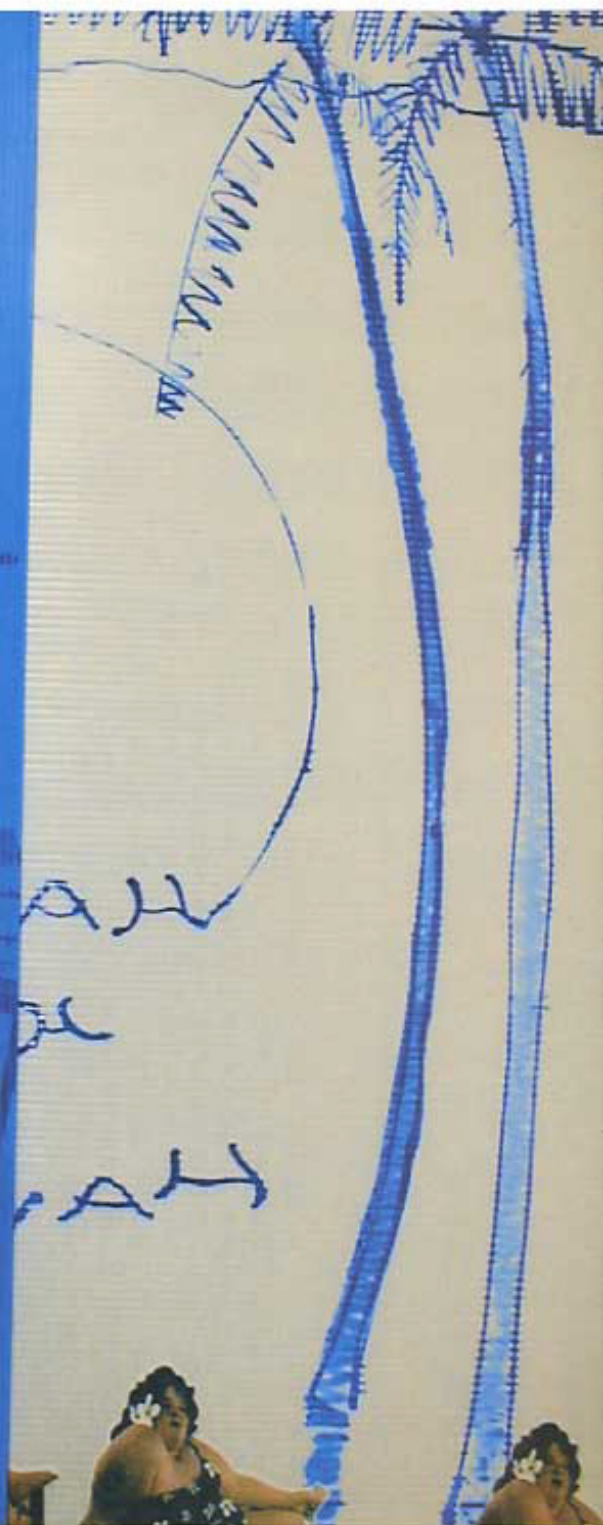
六花

俳句雑誌

りっか

1

designed by Tomoko Tanaka



訪
戴



山田六甲

エフエム三木忘年会三句

混浴の足湯に年を忘れけり
声美人揃ひの忘年会湯宿
忘年会口から生まれた人ばかり
包帯の白は明るし年の暮
暗がりを鷺帰るかな大晦日
年の閑誤植の劫を背負ひつつ

新年の一本杉に池の風
印南野の池風いでこそ大旦
生け花の天地人なる淑気かな

「俳壇」一月号五句

高砂や尾上の松や年新た
父の座に父が座りて淑気かな
印南の野中の泉若井汲む
繭^{かいこだま}玉揺れてをりけり古柱
ひとり削りし俎板に齋打つ
としひとつとれば五十九ひめ始

子規忌

二 瓶 洋 子

先生に手紙書きある子規忌かな
踏み入りしところ穂絮の飛びにけり
秋鴉甘えるやうな声放つ
秋雨や臥せゐて思ふこと多く
御廟への坂のぬかるみ木の実落つ

花 芒

鳴 海 清 美

こそばゆき言葉貫へり花芒
峡の空暗みて鷹の渡りかな
剥製の馬の耳立つ秋の風
水音の頭上にありぬ秋山路
銀漢のひとつとなりて旅寝かな

葛の葉

中 村 房 江

蜻 壺 の ひ び も 乾 き て 秋 彼 岸
信 太 来 て 狐 嫁 入 る 秋 彼 岸
花 野 な か じ ゃ ん け ん ぽ ん と 散 り ぢ り に
葛 の 葉 に 小 鳥 の 来 た り 長 屋 門
雁 渡 る 白 狐 と ひ と の 恋 ば な し

一 月

松 山 律 子

初 昔 も う す ぐ 喜 寿 が や っ て く る
一 月 の テ レ カ の 残 り 一 通 話
生 き て い る こ と が 奇 跡 よ 嫁 が 君
い つ か は 死 ぬ 着 飾 っ て ゆ く 初 詣
更 地 十 年 ま た 一 月 の 十 七 日

シクラメン妻の誕生日に開く 宮森 毅

ロンドンの時刻に合はせ初メール

下の句を息をころして待つ歌留多

達磨市目のなき顔をとりどりに

早咲きの梅ほころびぬ母の里

シクラメンは春の季語。

現在店頭で売られているシクラメンは温室で育ててあるから、十二月には市場に出回るが露地栽培なら春になって開花するから、春の出来事として解釈するのが穏当だろう。それはそれとして、鉢植えを買うときに、作者はきつと細君の誕生日に開きそうなシクラメンを、真剣に選んだであろう。

同人作品

楳木集



月の窓

笹村 政子

台風のなごりの疵や村界碑
風鎮のひとつ欠けたる文化の日
蔦紅葉二階に低き衣紋掛
灯を消さば子よ月光に攫はれむか
預りし子に泣かされて月の窓

明月

K O K I A

不揃ひ

信崎 和葉

白無垢を着せたるやうな秋の鯉
明月や高松行の最終船
朝の月朝爽爽としてをりぬ
秋天や外反拇趾の痛み出す
ここからは住吉村よ紅葉川

不器用に生き不揃ひのカリン挽ぐ
コスモスやゆるやかに母ちぢまつて
草紅葉値切り倒して陶器買ふ
木犀や空のみ映す文机
松籟や夜長に捲くるかの子伝

菜根譚



穴甲

私もエフエム三木のスタジオ入りの時には必ず、スタジオ前の池の鯉を観る。そのおかげで少しく鯉の句が出来た。様々な鯉が泳いでいるが、私の眼はいつしか一匹の鯉に注目していることがある。作者もそうだ。一匹に集中してくるとやがて白色の鯉が花嫁に見えてきたのだ。我慢したおかげで一句を得た。

預かりし子に泣かされて月の窓 笹村 政子

誰が泣かされたのかは言っていないけれど、そのことよって、読者は様々な解釈をすることになるので、欠点のある句と言えなくもない。しかし、そのようにこの句を位置づけしてしまうと鑑賞のおもしろさを削ぐことになるから、これは句の広がりを持った句として読めばいいと思う。①作者が泣かされた。②作者の子供が泣かされた。③作者の孫が泣かされた。などいろいろな場面が想像できるではないか。

いずれにせよ、「預かった子供に泣かされた」というとらえ方が素晴らしいのだ。

コスモスやゆるやかに母ちぢまつて

信崎 和葉

日も恋し火も灯も恋し爪紅

武田 美雪

手にのせし新米が日に透きとほる

田中 武彦

富有柿昭和一桁わるびれず

中野 哲子

体操の上手に見ゆる秋の影

西塚 成代

亡き母によく似た人や秋のバス

馬場美智子

ばつた飛ぶ鴨居に掛けし子のパジャマ

松下 幸恵

橙木集より

白無垢を着せたるやうな秋の鯉

KOKIA

実をつけぬ柚子の大馬鹿伐られけり 松本文一郎

桃栗三年柿八年そのあとに柚子の大馬鹿〇〇年とくる。しかし寡聞にして〇〇のところを私は知らない。柚子の大馬鹿十八年柚子は九年で成りかかる柚子は九年で花ざかり：梅は酸い酸い十三年。(だったと記憶しているがいかがだろうか？間違つたら教えて)。

つまり生きている間に実生の柚子がなるのは難しいと昔は言っていたようで、現在は殆どが接ぎ木をしてあって、園芸店では実の付いた鉢植えなども売っている。

掲句はなかなか実を付けぬ柚子が伐られてしまったという残酷物語で、この柚子がもしかしたら十二年物だったらと思うと余計哀れに思ってしまうのである。何だかこの柚子どころなく六甲に似ているなあ。ああ哀れ。

夕食に子守の礼の秋刀魚焼く
冗談の今日は腹立つ大晦日
シクラメン妻の誕生日に開く
風鈴の形様々に風を呼ぶ
秋味のたつぷり卵かき出さる
雨月かなやけに明るいシャンデリア
爽やかや出生届ふところに
草風などといわれて風に跳ね
家出した猫のまんまる後の月

三井 孝子
水谷ひさ江
宮森 毅
物江 昌子
池崎るり子
市川伊團次
岩松 八重
貝森 光大
角田 信子

六花集より

綿棒で耳に居つきし虫の声 近藤 貞子

近藤さんはいつも厳しい質問をしてくる。意見を突いてくるのだ。つまり分り切ったことを質問するのである。だから、俳句も自ずと意表を突いた作品も出てくるわけだ。

掲句、虫の声と綿棒を取り合わせた。普通は考えつかないことであるが、おそらく綿棒で耳掃除か掻いていたのだろうが、その結果虫の声が耳に居ついたら考えたのだ。そう言われればそのようなことも起こりうることであり、そのことを俳句にすかさず取り込んだことが良かったと思う。俳句のアンテナが三本立っていたのだ。圏外にいたのでは俳句はなかなか出来ない。

十六夜や誰にも電話つながらず ことり

この句ですぐに思い出したのは、「こんなよい月を一人で見ている」という須磨寺で作った尾崎放哉の作品。見事な十六夜の月に気づいた作者は、おそらく友人、知人、六甲、誰彼なく「お月さんをみてごらん」と言いたくて電話をしまくったのだろう。だが、かけた電話の先の人々はみんな、悉く月を見に戸外へ出ていたから、電話がつながらなかったんだとき。ザンネー！(以下略)

六花集



近藤 貞子

綿棒で耳に居つきし虫の声
ひげ伸びて蟋蟀強くなりにつり
色変へぬ松に潮の荒々し
胸よりはづし愛の羽根もてあます
芋洗ふかつて砂金のとれし水

ことり

月光を身籠るように髪を梳く
十六夜や誰にも電話つながらず
冷やかな指と指とを絡めあう
くちづけに解かれてゆく秋思かな
抱きしめて呟いてみる夜長かな

新井 裕

秋の蠅一匹連れて吉野屋へ
鮎わつと海割り鳥と化す刹那
われからや一部屋空きしかもめ荘
障子貼る口に唾へし肥後守
鶏頭の一本立つはアラ一の神